

特集 「古典学の再構築」計画研究の概要

- 1. 総括班研究..... 4
- 2. 調整班研究..... 5
- 3. 専門研究 8

特定領域研究「古典学の再構築」には、39件の計画研究が立てられている。

39件の内訳は、総括班研究1件、調整班研究7件、専門研究31件である。各専門研究は、7種の研究項目に対応する7調整班のいずれかに所属し、調整班研究は、班内の専門研究間の連絡・調整を行う。総括班研究は、特定領域研究全体の連絡をはかり、統括する。

ここには、昨年12月に文部省に提出された各計画研究の計画調書概要から、「研究組織」、「研究目的」、「研究計画・方法」の項を抜粋して収録する。

特定領域研究「古典学の再構築」の研究成果は、これら39件の計画研究を中核として形成されることになる。

「古典学の再構築」総括班研究

研究代表者 中谷 英明

研究分担者 藤沢 令夫, 高崎 直道, 池田 知久,
関根 清三, 徳永 宗雄, 内山 勝利,
江島 恵教, 木田 章義, 中川 久定,
丸井 浩, 斎藤 希史

研究目的

I. 研究目的

- 1. 近代古典学の歴史と現状の総括
- 2. 近代古典学の方法論の見直し・新方法論の構築
- 3. 新方法論による「新しい古典像」の創造とその公開（『講座・古典学』『古典選集』の刊行）
- 4. 古典諸学の連携を今後とも組織的かつ恒常的に行うための組織作り
- 5. 上記の研究目的を達成するための統括・連絡・広報

II. 本研究の特色と意義

- 1. 本研究は、19世紀初頭に近代古典学が成立して以来初の古典学の主要分野全体の連携による研究である。
- 2. 19世紀西洋思想の枠組みを取り払い、また、情報処理法の標準確立によって、古典学の刷新を

はかる。

- 3. 「新しい古典像」の公開により、現代日本に必要とされる深い教養と自立した精神を涵養する。
- 4. 現在、古典学主要分野のすべてに高水準の研究者を擁する国は他に例がなく、この共同研究は日本においてのみ可能である。

研究計画・方法

平成11年度は、以下の方法・手順によって、上記の総括班研究目的を遂行する。

- a. 総括班会議 会議費・国内旅費（年4回：平成10年5,7,12月、平成11年3月に予定）
- b. 計画研究者・公募研究者による領域全体会議 会議費・通信費（100人参加年2回）
- c. 公開シンポジウム開催 外国旅費・国内旅費・会議費・ポスター印刷費・謝金（年2回）
- d. ニューズレター『古典学の再構築』の発行、全国の研究者への配布 コンピュータ購入費・印刷費・通信費・謝金（年3冊500人）
- e. インターネット・ホームページの開設と運営 コンピュータ購入費・謝金
- f. 散逸が懸念される写本・刊本・マイクロフィルム等の購入 写本費等
- g. 外国の古典学の歴史・組織・施設・研究者等の調査 外国旅費

- e. 総括班事務局運営費（以上の研究活動にかかわる一切の事務） コンピュータ購入費・謝金

調整班研究A01「原典」

調整班代表 池田 知久

研究目的

- (1) 目的：第1，各文明における原典の状況を全体的、文化横断的に解明。第2，最近半世紀間の各分野における古典学の総括及び古典学全体に対する総括。また古典の新たな日本語訳を作る試み。第3，古典伝承（口承・抄写）の一般理論を確立。第4，原典の内外における写本・版本の所在の調査，電子機器を用いたそのデータベース化。共同利用の電子機器の購入。
- (2) 特色：各文明における原典の状況をふまえた古典についての全体的、総合的な研究。近半世紀の古典学全体に対する総括の上に立った新たな古典学，特に伝承の一般理論の確立を目指すもの。
- (3) 位置づけ：国内外では各分野における原典研究は著しく進展しているが，本研究計画のような全体的、総合的な研究はいまだかつて提起されたことがない。
- (4) 準備状況：本研究課題に密接に関連した課題で代表者及び分担者が従来受けた研究費はないが，平成9年度以来精力的に準備作業を行って今日に至っている。

研究計画・方法

1. 年3回研究会議を開き「目的」の第1～第4について検討する。やや多額の旅費・謝金・会議費が必要。11年度は主に「目的」第1の各文明における原典の状況の相互理解及び「目的」第4の内外における原典の調査結果の報告等に重点を置き，西洋・イスラム・朝鮮等については各1名の専門家を招聘して意見を聞く。会議では代表者・分担者の全員が専門に基づいた報告を行い，成果は「古典学の再構築」のニューズレター等に掲載。役割分担は池田が全体の統括と中国，五味が日本，高橋が南インド・タミル，御牧がチベット，間野がチャガタイ・トルコ語，ペルシア語の古典をそれぞれ担当する。
2. 「目的」第4に沿ってCDリライタブル・オーバーライトMOドライブを購入し蒐集したテキストの電子化等を進める。
3. 「原典」班に関わる事務を処理するためアルバイト職員を雇用する。
4. 他の古典諸学との協力・連携を求めて国際シンポジウムを開催する。

調整班研究A02「本文批評と解釈」

調整班代表 関根 清三

研究目的

1. 調整班研究「本文批評と解釈」の研究目的は，日本・中国・チベット・インド・イスラエル・イスラム・西洋の諸古典学が結集して，本文批評と解釈の，新しい理論と実際を提示することである。2. 従来の古典学では，その方法論に潜む価値観（例えば近代西欧特有の自然観や人間観など）が古典本文の客観的な読みを阻害する傾向が少なからずあり，また近年急速に発達してきたコンピューターの総合的な利用法について十分な検討がなされて来なかった。3. 本調整班研究の学術的特色・意義はさしあたって，この二点の不備を補い，諸古典本文固有の論理を客観的に記述する視座を創出すること，またコンピューターを駆使した古典解釈学の標準を確立し，これを普及させること，に存する。しかもそのために，近代古典学の歴史上初めて，諸古典学の連携を実現し，過去の成果と方法論的反省を共有しつつ，新しい古典像創造の作業を共同して行うのである。我が国は，現在，古典学の全主要領域に高水準の研究者を擁するが，このような国は他に例を見ず，古典諸学全体の連携による古典学再構築は，日本の古典学のみがなしうる国際的貢献となる。加えてこのような貢献は，新しい古典学の成果と新しい日本語訳の公開につながり，現代日本文化の基層を一層堅固なものとなし，その一段の深化に資するはずである。こうした目的のために過去2年間，4. 「基盤研究」「特定領域研究」総括班研究による準備がなされており，既に30頁にわたるニューズレター等でその成果は公にされている。

研究計画・方法

1. 「本文批評と解釈」調整班の基本計画としては，(1) 「古典本文」の範囲を，原則として中世までとし，状況に応じて柔軟に考えること，また人文科学に限らず，法律等，社会科学の対象をも含むこと，(2) 諸領域の古典学の恒常的交流を実現すること，(3) 諸領域共通の「解釈」の問題を中心に，研究成果の公開を行うこと，などが挙げられる。
2. 研究組織・方法としては，「本文批評と解釈」の研究項目について，日本，中国，チベット，インド，イスラエル，イスラム，西洋の7分野の専門家たちによって，共同研究をするものとする。それぞれの領域の研究分担者および公募研究代表者たちが毎年度成果を発表し，調整班代表者はそれらの発表の場について企画し，会議お